

## 中島広足と幕末国学の研究

### 論文審査の結果の要旨

本論文は、幕末の熊本・長崎・大坂を舞台に活躍した国学者・中島広足に焦点を当て、幕末から明治初期にかけての国学史の諸問題を考察したものである。

第一章においては、広足、ならびに長崎の地に広足が興した<sup>かしそ</sup>檀園社中の文事・動向をもとに、従来のような中央歌壇中心の視点ではなく、長崎の地から中央歌壇を照射した論を展開している。第一節は、広足の養子・中島広行が、本居宣長を祖とする伊勢鈴屋社中（以下「鈴門」と略）の沖安海の歌論を論駁した『さゝぐり』成立の経緯を明らかにし、長崎の檀園社中が、鈴門と論争を展開するほどの学力を有していたことを指摘する。第二節は、宣長歌論批判の書である『後の歌がたり』を軸として、広足歌論の通時的考察を試みている。その結果、文政末より天保初頭にかけて、一時的に鈴門へ歩み寄ったものの、結局は賀茂真淵を祖とする江戸派の歌論を生涯に亘り堅持したとする。第三節は、上述した一時的な鈴門への歩み寄りの要因が、宣長『詞の玉緒』を始めとするその語学書への関心であって、その歌論・歌風に関しては、批判的な姿勢を貫いていたことが示された。この第一章に関しては、檀園社中の形成を論じるにあたって、長崎諏訪神社を中心とした文化圏の存在とその意味を考慮に入れ、広足の和歌の実作を今後さらに詳しく分析することで、論の蓋然性がより高まるであろうことが確認された。

第二章においては、広足およびその周辺の国学者の思想に着眼した論が展開される。第一節は、広足が檀園社中のメンバーである長崎の地役人を通して、オランダ風説書などの異国情報の収集に努め、それを江戸の伴信友、和歌山の長澤伴雄などの国学者に伝達していた事実を指摘している。第二・三節は、広足の『樺島浪風記』なる作品が、シーボルト事件発覚後、国学者たちのあいだで、単なる台風災害のルポルタージュとしてではなく、神風の加護を具体的に描いた作品へと読みかえられる過程が論じられている。第四節は、広足詠の長歌「見蒙古襲来絵巻作歌」が作られた背景を検証するとともに、上代から長らく「伊勢」に掛かる枕詞として、実質的な意味を持たなかった歌語「神風」が、幕末において、外敵を討ち滅ぼす神の風の意に詠みかえられることを指摘している。この第二章に関しては、論者は『樺島浪風記』の読みかえが行われた背景として、当時の儒学者たちが神風否定論を相次いで提出しており、それに対する反論の意図があったことを挙げているが、神風に関する議論をさらに通時的・共時的な広がりをもって探究することで、結論がより強固なものになるであろうと思われる。

第三、四章は、第一、二章の論考の基盤となる資料が翻刻紹介されている。第三章は長崎歴史文化博物館所蔵の中島広足関係書の詳細な書誌情報、第四章は檀園社中の面々が出詠している『瓊浦集』、同社中の主要メンバーである青木永章の『玉園長歌集』、近藤光輔の『夜雨庵集』といった個人歌集の全文翻刻で、いずれも未翻刻の資料であり、研究的価値は高い。

以上のように、本論文は長崎という地方歌壇を対象としつつも、それが中央歌壇とどのように関わっていたのか、あるいは国学思想のメインストリームの中で、彼らの思想や営為がどのような位置付けにあるのかを、膨大な量の未翻刻資料にあたりながら、文献学的に堅実な手続きをへて論述しており、今後の幕末国学研究の指針となるべき労作と見受けられる。

よって本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに十分な能力を持つ者であると認めるものである。